

# 国境を越え、今年も法要

## 栗原市 大林寺 韓国からも多数参列

韓国、日本の国境を越えて今年も、安重根義士と千葉十七居士の追悼法要（大林寺護国寺主催）が三日、栗原市若柳の大林寺（斎藤泰彦住職）で行われた。

民族独立を願う義士・当時三十歳の安重根（一八七九—一九一〇年）は、伊藤博文暗殺の罪で獄中に。栗原市栗駒猿飛来出身で当時二十七歳だった千葉十七は、陸軍憲兵として旅順獄中の安を看守する役だった。

死刑を目前にしながら安が説く東洋平和論と民族独立への悲願に千葉は深く心動かされ、二人は次第に敬愛で結ばれるようになった。

「為国献身軍人本文」（国のため身を献げるは軍人の本文なり）という書は、千葉の願いにこたえ、一九一〇（明治四十三年三月二十六日、安が処刑される五分前に今生の別れとして贈ったもの。

千葉や遺族が大切に保管していた書は、安生誕百周年にあたる一九七九年、安の祖国に返還された。これを記念して、同寺に碑が建てられている。

四半世紀を迎える今回の追悼法要に、韓国側からは金一萬（キム・イルマン）駐仙台大韓民国総領事、金善龍（キム・ソノヨン）在日本大韓民国

民団宮城県地方本部団長ら三十人ほどが参加。日本側からも千葉十七の遺族や若柳、田尻、涌谷など縁の深い各地区からも参加した。

従来は韓国側から三、四人、多くても十人ほどの参加だった。これを大幅に上回る参加人数に、斎藤住職は「それだけ、この儀式や場所が日韓親善の基点であり、交流の精神的シンボルとして見られているということでは」と話している。

本堂と屋外にある碑前で、それぞれ法会が営まれた。碑前で姜德基（カン・ドッキ）安重根義士崇慕会副理事長が「安は真実の東洋平和の守護

者。戦後六十一年たった今、両国の不幸な過去を清算し、互いに助け合い発展しようではありませんか」などと述べた後、全員で焼香や献花を行った。

毎年行われる法要について斎藤住職は、年を重ねるごとに重みを感じているという。「真の平和を二人は願ったのだと思う。日韓、アジア、世界の平和を今日からまた、あらためて念じたい」とどんなにもつれた糸も、努力でほぐせる、自分は懺悔（ざんげ）の思いで皆さんを迎え法要を行っている。次世代に引き継ぎ、二度と戦争を繰り返さぬよう願っている」などと語っていた。

（財）人間科学研究所理事長、小松電機産業株式会社代表取締役、孔子文化大学客員教授の小松昭夫さんは「現在とは歴史の一こま、歴史を学ばない



碑の前で平和を祈りながら読経する斎藤住職

れば未来の希望に向かうことはできない。今の自分も、長い歴史の構成員であり当事者。先を見通し、百年先に感謝されるように生きていかなければ」と話していた。

朴祥俊（パク・サンジュン）大韓民国黄海道中央道民会長は、韓国にとって安義士は、本当の東洋平和を望んだ哲学的な愛国主義者としたうえで「昔の怨念は、それとして流すべき。今後は互

いを信じ助け合い、あのような侵略が二度と起こらないよう友好関係を築きたい」「両国が利害で衝突する関係が長く続いては困る。昔からのつながりが、一時の流れで滞ってはならない。侵略は決して許されるべきことではないが、この法要が民間レベルの交流になれば」と語っていた。